

## 中世後期イタリア中部における絵画の動向

初期キリスト教時代における十字架の表現<sup>1</sup>

池上公平

はじめに

十字架はキリスト教の象徴である。しかし今日、十字架は信仰とは関わりなく、人々が気軽に身につけるアクセサリーともなっている。アクセサリーとして十字架を身につける時、その本来の意味や由来を思う人は、相当に敬虔なクリスチャンに限られるであろう。一般には本来の意味などほとんど意識されることはない。にもかかわらず、時として、十字架につきまわっていた意味がはしなくも露わになることがある。

2001年9月11日の世界貿易センタービルへのテロ攻撃の後に見られた現象は興味深い。ビルが無残に崩壊した現場には十字形を呈した鉄骨の残骸が見出された。いつしかそこには人々が記念にものを置いたりサインをしたりするようになり、その場で近隣の教会の司祭がミサを挙げる事態となった。現在、その「十字架」はグラウンドゼロ・ミュージアムに、遺物の一つとして展示されている<sup>2</sup>。展示に至るまでにはさまざまな議論があった。9.11の犠牲者がキリスト教徒ばかりではないことは言うまでもない。イスラム教徒もユダヤ教徒も、ヒन्दゥー教徒も仏教徒も含まれている。にもかかわらずそこに鎮魂の意味が見出されたのは、イスラム教徒によるキリスト教のアメリカに対する攻撃という意識が作用したことは疑いなく、そこに批判の余地があることも疑いない。だがそれがすべてとは、おそらく言えないだろう。そこには十字架というものが持つ宗教的象徴性が深く浸透しているという事実、一宗教の象徴であるに止まらず、普遍的な意味を獲得しており、非キリスト教徒にあっても同様であるという事実があるように思われる<sup>3</sup>。

類似の現象は2019年の4月15日から16日にかけて起きたパリ、ノートルダム大聖堂の火災においても見られた。火災の後、焼け残った祭壇上の金属製の十字架がSNS上で大きな注目を集めたのである。そのことはとりもおさず、十字架というキリスト教という一宗教の象徴にすぎない物体に対して、日頃は無関心な人々も何らかの象徴的な意味を見出したことを示している。SNSの様々な発言の中には奇跡だという声もあったが、金属の融点は木材の発火点とくらべてはるかに高く、十

<sup>1</sup> 本研究課題において筆者は2020年3月にイタリアでの調査を予定していたが、周知の如くCOVID-19のパンデミックにより、渡航が不可能となり、調査を断念せざるをえなかった。そこでやむをえず、当初の計画は中断し、本研究課題と密接な関係を有する初期キリスト教時代の十字架の表現について論ずることとした。

<sup>2</sup> <https://collection.911memorial.org/Gallery/994> 2020年10月17日閲覧。

<sup>3</sup> Jensen, pp.vii-viii.

十字架が溶けたり燃えたりしなかったことには何の不思議もない<sup>4</sup>。焼け残った十字架に奇跡を見出す類いの発言は、非科学的、非合理的ではあるが、しかし、このような発言が出てくること自体が、十字架につきまとう象徴的な意味を物語っているのである。

こうした事柄は、十字架というモチーフが美術において表現されるようになって以来の、長い歴史の後に生じたものである。ならば十字架が美術の領域で表現されるようになったその当初の状況、また要因について考察することも意味があろう。本稿では、初期キリスト教美術において、四世紀を中心に、十字架がどのように表現されてきたか、またその背景について、考察を試みるものである。しかしながら、この分野には、キリスト教諸学、美術史学、考古学のいずれにおいても膨大な研究の積み重ねがある。もとより門外漢の筆者の能力と知識が及ぶところではない。本稿はこの分野に一石を投ずることを意図するのではなく、管見の及ぶかぎりではあるが、既存の研究に拠りながら初期キリスト教美術において十字架がなにゆえ表現されるに至ったか、当初の展開をたどり、その概略を素描することを意図している。

## (1) イエスの磔刑

事の始まりはイエスの磔刑である。少々長いが、マタイ福音書の記述を以下に引用する。

ピラトが、「ではメシアと言われているイエスの方は、どうしたらよいか」と言うと、皆は、「十字架につけろ」と言った。ピラトは、「一体どんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び続けた。ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗って言った。「この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちの問題だ。」民はこぞって答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。

兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、そこに座って見張りをし

<sup>4</sup> <https://nlabitmedia.co.jp/nl/articles/1904/19/news123.html> 2020年10月5日閲覧。

ていた。イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書を掲げた。折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りてこい。」同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやる。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」という者もいた。そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。(27:22-26,33-50 聖書からの引用はすべて新共同訳による。)

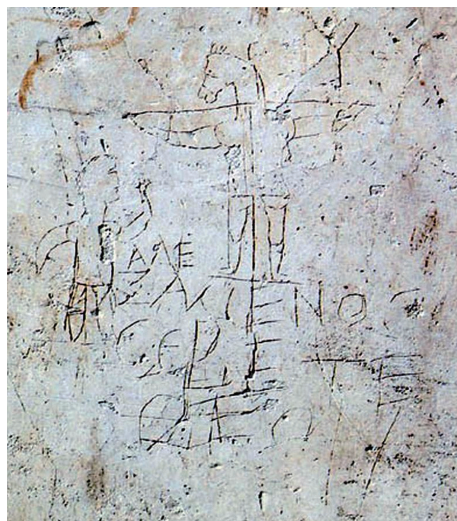
4つの福音書の記述は細部に異同はあるが大きな相違はない。いずれの記述においても、イエスの十字架上で死が苦痛に満ち、辱められたものとして描かれていることは共通している。見物の群衆にもものしられ、そこには救世主の英雄的な姿を見出すことはできない。また、イエスがどのような姿で十字架につけられたのか、美術作品に見られるように釘で打ち付けられたのかそれとも縛り付けられたのか、十字架の形状がどのようなものであったのか、具体的な情報はまったく欠如していることを指摘しておかなければならない。

イエスの磔刑については、タキトゥス『年代記』第15巻44<sup>5</sup>やフラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』XVIII 3-3(通算63-64)<sup>6</sup>にも言及がある。タキトゥスは処刑方法については言及していない。ヨセフスには以下のようにある。「(第64節)ピラトス(ピラト)は、彼が我々(ユダヤ人)の指導者たちによって告発されると、十字架刑の判決を下したが、最初に彼を愛するようになった者たちは、彼を見捨てようとはしなかった。すると彼は三日目に復活して、彼らの中にその姿を見せた。既に神の預言者たちは、これらのことや、さらに、彼に関するその他無数の驚嘆すべき事柄を語っていたが、それが実現したのである。なお、彼の名にちなんでクリスティアノイ(キリスト教徒)と呼ばれる族は、その後現在に至るまで、連綿として残っている。」この箇所は後世の挿入であるとも言われており、そのように思われる節も確かにあるが、イエスの磔刑への言及までも疑わなければならぬ理由はないと思われる。

<sup>5</sup> タキトゥス第15巻44 pp.269-270.

<sup>6</sup> ヨセフス 6 pp.34-35.

ローマ時代には磔刑、すなわち木の柱に罪人を釘付けにして殺す処刑方法が、実際に行われていたことは確かである。古く、アッシリア、フェニキア、ペルシアなどでこの方式による死刑が行われており、ローマ人はこの処刑方法をポエニ戦争後、カルタゴに倣って導入したとされる<sup>7</sup>。エルサレムで、1世紀に処刑された人物の墓から、木に釘で打ち付けられた足の骨の断片が出土しており<sup>8</sup>、またプテオーリ（現ポッツオーリ）とローマで、磔刑に処された罪人を表したグラフィート（線刻）が発見されている<sup>9</sup>ことから、ローマ時代に磔刑が存在していたことが明らかである。ただし、その時代の処刑方法は、美術におけるキリストの磔刑のイメージのような十字架ばかりではなく、形状は一本の柱のこともあればT字形のこともあったようである。多くの場合は一本の木の柱であり、受刑者はそこに縛り付けられたか、釘で打ちつけられた。十字架の形を取る場合、大方の磔刑図のように足をそろえてではなく、プテオーリで発見されたグラフィートが示すように、開いて打ちつけられることが多かった。柱は処刑場にあらかじめ立てられ、受刑者は横木を自ら担いで処刑場まで歩かされた。福音書ではイエスは十字架を担いでゴルゴタの丘へと歩いたことになっているが、実際にイエスが担いだのは横木だけであったようである<sup>10</sup>。柱に縛られたか釘で打ち付けられた受刑者は窒息するか出血性ショックで絶命したが、多くの場合、それには一、二日程度を要した。



(図1) 《アレクサメノスのグラフィート》  
2世紀頃 ローマ パラティーノ博物館  
[https://ja.wikipedia.org/wiki/アレクサメノスの掻き絵#/media/ファイル:Jesus\\_graffito.jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/アレクサメノスの掻き絵#/media/ファイル:Jesus_graffito.jpg)

このような処刑方法がどのように人々に受け止められていたかは、旧約聖書の記述から推し量ることができる。「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけるならば、死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた死体は、神に呪われたものだからである。」(申命記21.22-23) 福音書において、十字架に架けられたイエスがユダヤ人の群衆からののしられる様は、申命記の記述を見れば納得が行くであろう。前出のローマで発見された磔刑のグラフィートは現在パラティーノ博物館にあるが、《アレクサメノスのグラフィート》(図1)として有名である。そこにはロバの頭を持った人物が十字架につけられており、傍らに彼を拝む人物が添えられ、「アレクサメノスは彼の神を礼拝する」と書かれている。この図柄と言葉から、キリスト教徒が磔刑に処された罪人を礼拝していることが、嫌悪

<sup>7</sup> Jensen, p.8.

<sup>8</sup> Jensen, p.11, pls.1-3および<https://en.wikipedia.org/wiki/Jehohanan>.

<sup>9</sup> Jensen, pls.1.4, 1.5.

<sup>10</sup> Jensen, p.10.

と侮蔑をもって受け止められていたことが推測できる。それは、申命記の記述から知られるユダヤ人の磔刑に対する態度と同じと言ってさしつかえない。磔刑はおぞましく、残酷で、惨めで悲惨であり、受刑者にこの上ない苦痛と屈辱を与え、処刑の様を見る人々にも恐怖と嫌悪を与えるものに他ならない。《アレクサメノスのグラフィート》がキリスト教徒を揶揄しているのも、磔刑がもっていた意味を考えるならば、容易に理解できる。それは1世紀から2世紀頃の古代ローマ社会において、キリスト教徒が当時の人々の目に異質な集団と映っていたことによるだろう。64年に起きたローマ大火の際、ネロがその原因をキリスト教徒になすりつけ、迫害したことも、キリスト教徒が異質な集団とみなされていたことを裏書きする<sup>11</sup>。このような否定的な意味がまとわりついている磔刑が、キリスト教の中心に位置づけられ、救済を意味する象徴的なモチーフとして確立されるには、その価値の根本的な転換が必要であったことは想像に難くない。

## (2) 十字架の転換

価値の根本的な転換をもたらしたのはパウロとされる。キリスト教徒にあっては磔刑は救済の契機としての贖罪の証と捉えられていた。パウロ自身、「ローマの信徒への手紙」8.3で「肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです」と述べている。しかしパウロは、磔刑を贖罪であるにとどまらず、その価値の、十字架の価値の根本的な転換をもたらした。

新約聖書には21の書簡が収められている。21の書簡のうち、パウロの真筆とされる書簡は、「ローマの信徒への手紙」、「コリントの信徒への手紙一」、「コリントの信徒への手紙二」、「ガラテヤの信徒への手紙」、「フィリピの信徒への手紙」、「テサロニケの信徒への手紙一」、「フィレモンへの手紙」の7篇である。これらのうち、「テサロニケの信徒への手紙一」と「フィレモンへの手紙」を除く5篇に、キリストの磔刑ないし十字架への言及がある。パウロの真筆とはされていないが、「コロサイの信徒への手紙」、「エフェソの信徒への手紙」、「ヘブライ人への手紙」にも、十字架への言及がある。これらのうち、十字架に言及している箇所は、「ローマの信徒への手紙」6.6、「コリントの信徒への手紙一」1.18、2.1-2、「コリントの信徒への手紙二」11.30、12.9、13.4、「ガラテヤの信徒への手紙」2.19、3.1、3.13、5.11、6.14、「フィリピの信徒への手紙」2.8、「コロサイの信徒への手紙」2.13-15、「エフェソの信徒への手紙」2.14-18である。「フィリピの信徒への手紙」2.6-11を引く。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリス

<sup>11</sup> タキトゥス前掲箇所。

トを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

ここでは神が自ら身を低くして人間となり、さらに「十字架の死に至るまで」従順であったので、かえって高く上げられ、名誉と栄光を与えられたことが記されている。まさしく自らを低くする者は高くされるのである。「フィリピ」のこの言葉は、「ローマの信徒への手紙」にある「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです」(1.3-4)とともに、イエスが死と復活によって神の子と定められたことを述べている。これらの記述はパウロ以前に遡る古い伝承に由来するという<sup>12</sup>。また、「ガラテヤの信徒への手紙」3.13では、申命記21.22-23をふまえ、「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。『木にかけられた者は皆呪われている』と書いてあるからです」と、キリストの磔刑を「呪い」と述べている。さらに、「コリントの信徒への手紙一」では「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」(1.18)と述べ、「コリントの信徒への手紙二」においては、「キリストは、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力によって生きておられるのです」(13.4)と述べている。

すなわち、パウロに拠れば、キリストが十字架につけられたのは弱さのゆえであり、呪いであり、愚かなもの、否定的なものであった。にもかかわらず、あるいはそれゆえにこそ、キリストが復活することによって磔刑は神の力を示すものとなり、救いの証となった。キリストの死は単なる贖罪の死ではない。この「十字架の逆説」がパウロの思想の根幹をなしている<sup>13</sup>。

当初パウロはサウルと名乗り、ファリサイ派としてキリスト教徒を迫害する側に立っていた。パウロがキリスト教徒を迫害したのは、罪人として十字架につけられて処刑された人間をキリスト＝救世主と主張する人々に対する違和感、反感と怒りのゆえであっただろう<sup>14</sup>。今日になぞらえるならば、このパウロの感情は例えば、オウム真理教事件の首謀者であった麻原彰晃をいまだに崇める者たちに対し、一般の人々も公安当局も嫌悪感を抱き、警戒心を隠さないのと同様ではないかと考えられる。

しかし、パウロは使徒言行録第9章(同じ内容が第22章にもある)にあるように、ダマスコへ向かう途中、劇的な回心を経験した。十字架の価値の転換もそこから始まったのである。パウロがいかんにして、おぞましい忌むべき磔刑という処刑方法、その道具たる十字架の価値を根本的に転換させたのか、それを論ずることは筆者の力の及ぶところではない<sup>15</sup>。ここでは、パウロによってキリ

<sup>12</sup> 青野1989, p.13.

<sup>13</sup> 青野1989. また青野2006, pp.165-166.

<sup>14</sup> 青野2016 p.106.

<sup>15</sup> 青野1989, 青野2006を参照。

ストの磔刑と十字架とが、決定的な救済の出来事であり、生の根拠へと転換させられたことを確認するにとどめたい。

十字架への言及が文献に数多く見出されるようになるのは、パウロ以後、2世紀、3世紀の教父、護教家の著作においてである。

まず注目されるのは、アンティオキアの司教で、ローマにおいて110年に殉教したイグナティオスの手紙である。「キリストは私達のために死なれたのです。それは彼の死を信じて、あなた方が死を逃れるためなのです<sup>16</sup>」、「彼（キリスト）は十字架を通して、その受難により、あなた方を彼の肢体として御許に呼びたもうたのです<sup>17</sup>」というイグナティオスの言葉は、救済の契機としての受難＝磔刑を明瞭に示している。

リヨンの司教聖エイレナイオス（イレネウス）によれば、御言葉は「被造世界全体の中に〔十字架の形で〕貼り付けられ、神の言葉としてすべてのものを支配し、秩序づけている。そのために、それは目に見えない仕方で、『自分に属するもの』のもとへ『やって来て』、『肉となり』、万物がご自分の中で再び統合されるようにと、木に架けられたのである<sup>18</sup>。」ここでは、十字架が神による万物の統治の根源として世界の隅々まで行き渡るものとして捉えられており、おぞましい処刑の道具としての十字架という理解との対照は著しい。またエイレナイオスは、「かつて最初の人間による不従順は木によって起きた。その不従順を解消するために、主は『死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた』。すなわち、主はかつて木において生じた不従順を、木〔十字架〕に置いて生じた従順によって癒やしたのである<sup>19</sup>。」とも述べる。ここには、アダムとキリストのタイポロジカルな関係、救済の契機としての十字架という観点が提示されている。

165年頃に殉教したユスティノスの『アントニヌスに宛てたキリスト教徒のための弁明』（『第一弁明』）においては、十字架がキリストの力と支配を示す最大の象徴であり、世界の至る所に十字が見られ、「万物は、十字の形なしに秩序と連関を保」つことができない、と主張されている<sup>20</sup>。また船の帆柱、畑を耕す鋤、身体と腕、顔の造作も十字形を呈する人体など、十字形が至る所に見出され、そのことがとりもおさず十字架の普遍性を、それゆえキリストの十字架の至高の価値を表すものであるとも主張されている。また、『第二弁明』では、多くのキリスト教徒が、「ポンテオ・ピラトのもとに十字架につけられたイエス・キリストの名によって悪霊を追放し、癒しを施し」たと述べている<sup>21</sup>。

今挙げた例の他にも、ヒッポリュトス、ヨアンニス・クリソストモス、教皇レオ1世などの著作において十字架の価値の主張は数多く見られる。これらにおいて十字架は、そしてキリストの磔刑

<sup>16</sup> 『使徒教父文書』 p.178.

<sup>17</sup> 『使徒教父文書』 p.182.

<sup>18</sup> 『エイレナイオス5 異端反駁』 V, 18.3, pp.63-64.

<sup>19</sup> 『エイレナイオス5 異端反駁』 V, 16, p.57.ゴンサレスp.195.

<sup>20</sup> 『第一弁明』 p.55. ゴンサレスp.124, Jesnen, p.32.

<sup>21</sup> 『第二弁明』 6.6 p.73.

は、贖罪の証、救済の契機、勝利の象徴である。さまざまな事物に十字架の形を見出し、悪霊を退け、癒しを施す力があると主張するユスティノスの言葉には、十字架が単なる象徴物であるにとどまらず、破邪の効能を持つタリスマンとして捉えられていることもうかがえる。パウロ自身の「ガラテヤの信徒への手紙」6.17における「私は、イエスの焼き印を身に受けているのです」にもそのようなニュアンスが感じられる。こうした捉え方はパウロの「十字架の神学」とは異質なものにも思われるが、おそらくは当時のキリスト教社会においてはかなり広く受け入れられていたのではないかと考えられる。

### (3) 美術における十字架

数多ある主題の中でも十字架およびキリストの磔刑は、ヨーロッパの美術においてもっとも数が多く、もっとも重要なものである。磔刑の場面を再現するもの (Crucifixion)、十字架に磔にされたキリストを表すもの (Crucifix)、キリストを伴わない十字架そのものなど、類型はいくつかあるが、磔刑を含めた十字架は常にキリスト教美術の中心に位置している。もっとも残酷で悲惨で、恐怖と嫌悪を誘う磔刑やその道具としての十字架はいかにして美術の中心的主題となったのであろうか。

大英博物館所蔵のいわゆる《マスクル・カスケット》やサンタ・サビーナ聖堂木彫扉の《磔刑》(図2)が現存最古の例とされることがある。しかしこれらはCrucifixion、すなわちイエスの磔刑を物語の一部として、磔刑の場面の再現として表したものである。いずれも5世紀初めに位置づけられ、コンスタンティヌス帝によるキリスト教公認からはかなり時間が経っている。これらの例は十字架



(図2) 《キリストの磔刑》5世紀 ローマ サンタ・サビーナ聖堂

[https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/d/d1/Battenti\\_in\\_cipresso\\_di\\_santa\\_sabina%2C\\_V\\_secolo%2C\\_01\\_crucifissione\\_2.jpg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/d/d1/Battenti_in_cipresso_di_santa_sabina%2C_V_secolo%2C_01_crucifissione_2.jpg)

を表す最初の例であったわけではない。磔刑ではなく、イエスの体を伴わない十字架そのものならば、それ以前にも表現されていた。

いわゆるヘルクラネウムの十字架というものがある。紀元79年にウエスビウス火山の噴火によって埋没したヘルクラネウムの遺跡から発見されたもので、壁面に彫り込まれた十字形の窪みであり、あたかもキリストの十字架を礼拝対象として壁面に彫り込んだかのように、あるいは十字架をはめ込んでいた窪みであるかのように見える。しかしこれが果たして本当にキリスト教徒の十字架であるかどうかは明らかでは



ない。

パウロのローマの信徒への手紙が示すように、ローマに相当数のキリスト教徒がいたことは確かである。その存在は、上に指摘したように、64年のローマ大火の際に、その原因がキリスト教徒にあるとされ、当時の皇帝ネロによる迫害が起こったことでも裏書きされる。ペトロとパウロのローマにおける殉教は、ちょうどこの頃、60年代初めと考えられる。ローマがこのような状況であったならば、ポンペイやヘルクラネウムにもキリスト教徒がいたとしても不思議ではない。2世紀にはヴァチカンに聖ペトロのための小祠と祭壇があったことが知られている<sup>22</sup>ので、同様の祠や祭壇様の設備がヘルクラネウムやポンペイになかったと断言することはできない。しかし、現状ではこの「十字架」が確かにキリスト教のものかどうか、明らかではない<sup>23</sup>。1世紀後半にヘルクラネウムにキリスト教徒が確かに存在し、十字架を用いていたかどうかについては、今後の研究に委ねなければならない。

コンスタンティヌスは312年にローマ郊外ミルウィウス橋の戦いにおいてマクセンティウスを破り、帝国の支配権を掌握した。ラクタンティウスによれば、コンスタンティヌスは戦いの前夜、夢で兵士たちの盾にあるしるしをつけるよう指示された。それはX（キー）とP（ロー）の2文字を組み合わせたものに似ていた。これはキリストの象徴であり、この象徴をもって戦いに臨んだコンスタンティヌスはマクセンティウスに対して勝利を収めることができた。エウゼビオスによればこのエピソードは大分異なっており、コンスタンティヌスに幻影が現れたのは夜ではなく昼であり、しかもXPではなく光り輝く十字架であった。そしてその傍らには「このしるしによって汝は勝利を収める」と記されていたという<sup>24</sup>。お告げに従ってこのしるしを掲げて戦いに臨み、首尾良くライバルを打ち破ったコンスタンティヌスは、彼を勝利に導いたしるしを軍旗につけさせた。これをラバルムと言う。さらに彼はラバルムを持つ自身の肖像を作らせ、バシリカ・ノーヴァに設置させた<sup>25</sup>。

コンスタンティヌスに現れたヴィジョンの信憑性は定かでなく、彼に現れたしるしがどのような形状をしていたかも完全には明らかではないが、彼がキリスト教を公認し、この象徴を表したメダル（図3）やラバルムが知られていることなど、その後の事の推移から推して、コンスタンティヌスがXPをキリスト教徒にかかわるものと見なしていたと考えて差し支えない。しかし、エウゼビ



(図3) 《コンスタンティヌスのメダル》  
315年頃 ミュンヘン 国立博物館  
[http://www.staatliche-muenzsammlung.de/images/konstantin300dpi/konstantin-medaille\\_001a.jpg](http://www.staatliche-muenzsammlung.de/images/konstantin300dpi/konstantin-medaille_001a.jpg)

<sup>22</sup> Krautheimer, p.19, p.20.17 邦訳p.36.

<sup>23</sup> Granger Cook, pp.1-20. Jensen, p.42.

<sup>24</sup> Jensen, pp.52-53.

<sup>25</sup> Krautheimer, p.31. 邦訳p.51.

オスは十字架の幻影を見たと伝えているものの、コンスタンティヌスがラバルムに描かせたのはXPであり、XPはキリストを表すギリシア語の初めの2文字を組み合わせたクリスモンであって、これは厳密には十字架とは区別すべきものである。

最初の十字架の表現は石棺に見られると従来考えられてきた<sup>26</sup>。この点については異なる可能性が近年示されているが、それについては後に見ることとし、まず石棺に表された十字架を見てみよう。現在エルサレムの聖書の土地博物館所蔵の石棺がその最初の例とされる<sup>27</sup>。棺の表面は5つの区画に区分され、左右両端の区画は上下に分割され、人物をとまなう。波形式文を刻んだ区画を挟んで中央の区画では、上部に配されたメダイヨンの中に死者夫婦と思われる人物像が刻まれ、その下に十字架がある。十字架はオリーブの枝を編んだ輪で囲まれたXPを戴き、横木には一対の鳩が止まり、十字架の根元には二人の兵士が座り、一人は上を見上げ、もう一人はうなだれ、眠っているように見える。ヴァチカンのピオ・クリスティアーノ博物館所蔵でラテラーノ博物館旧蔵171番の石棺(図4)はよく似た図像を示し、その制作時期は4世紀中頃と考えられている。この石棺は円柱で表面を区分し、区分された区画それぞれに人物を配する。中央の区画ではエルサレムの石棺と同様、中央に置かれた十字架の横木の両端に一対の鳩が止まり、十字架の上にはオリーブの輪に囲まれたクリスモンが載っている。十字架の根元では二人の兵士が腰掛け、一人はクリスモンを見上げ、もう一人は眠っているように見える。このように、オリーブの輪に囲まれたクリスモンを戴き、鳩と兵士を伴う十字架を「勝利の十字架」と呼ぶ。「勝利の十字架」は石棺の装飾として現れ、



(図4)《勝利の十字架の石棺》(ラテラーノ博物館旧蔵171番) 4世紀中頃 ヴァチカン ピオ・クリスティアーノ博物館  
<https://i.pinimg.com/originals/2b/e0/31/2be031abc1ddc9060288d7daf1fa1800.jpg>

<sup>26</sup> Grabar, p.38.

<sup>27</sup> 山田2012 p.79.

30点余が知られている<sup>28</sup>。「勝利の十字架」の図像の起源は、ローマ軍の戦勝記念物トロペウム（トロパイオン）に由来すると言われる<sup>29</sup>。ローマ軍は長い棒の先に横木をつけ、鎧や武器などの戦利品をそこに架けた。これをトロペウムと呼ぶ。これを十字架に置き換えたものが「勝利の十字架」となった<sup>30</sup>。四世紀の石棺においては、この図像は、十字架上の死の後に復活したキリストを意味する。すなわち死に対する勝利を意味すると考えられる。同時に、ここにはエスカトロジカルな暗示があることが指摘されている<sup>31</sup>。

絵画において十字架を表した最初の作例が何かは正確には明らかではない。コンスタンティヌスのキリスト教公認後、時を置かず建設されたサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂、サン・ピエトロ・イン・ヴァティカーノ聖堂とも建立当初、アプシスのドームは金のモザイクで覆われ、図像を持たなかったらしい<sup>32</sup>。その後、これらの聖堂のアプシスには人物像を伴う図像が配されたが、失われた。現存作例では、ローマのサンタ・プデンツィアーナ聖堂のアプシスを飾るモザイク壁画がもっとも初期の例と考えられる（図5）。



(図5) 《使徒たちの間のキリスト》4世紀末 ローマ サンタ・プデンツィアーナ聖堂（筆者撮影）

<sup>28</sup> 名取1977, 82. 山田2012.

<sup>29</sup> Grabar, p.125.

<sup>30</sup> loc.cit.

<sup>31</sup> 名取1982, pp.61-2.

<sup>32</sup> Krautheimer, p.22. 邦訳p.40.

サンタ・プデンツィアーナ聖堂はエスキリーノの丘、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂に近い場所にあり、古代には浴場であった。これがキリスト教の聖堂に改装されたのは4世紀末で、アプシスのモザイク壁画もその頃に制作されたと思われる<sup>33</sup>。モザイク壁画は16世紀の改装の際に大幅に修復、改変され、両端にいた人物など一部が失われ、本来12人いた使徒が10人になっているが、ある程度当初の図様を保っていると考えられる。画面中央、玉座のキリストを中心に、向かって左（キリストの右）に聖パウロと四人の使徒、向かって右には聖ペトロと四人の使徒が並ぶ。パウロの背後には「異邦人の教会」の擬人像、ペトロの背後には「割礼を受けた者の教会」の擬人像が並ぶ。人物の背後にはアプシスの湾曲した壁面に沿うかのように、カーブを描くアーケードを備えた建物があり、その屋根の向こうにもいくつかの建物が見える。その間に、岩の上に宝石で飾られた十字架がそびえ立っている。空は赤みの差す雲が浮かび、黙示録の四つの生き物、向かって左から天使、ライオン、牛、鷲が姿を見せる。壁画の改変前に描かれた模写を見ると、キリストの玉座の下には聖霊の鳩と小羊が描かれていたことがわかる<sup>34</sup>。聖霊、小羊、十字架の組み合わせはフォンディヤチミティーレのバシリカにあったことが知られ<sup>35</sup>、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂などにも見られる。サンタ・プデンツィアーナを初めとするこうした作例が意味することは、この図像が三位一体とキリストの再臨を表すということである。その点において、これらの図像は、石棺装飾における「勝利の十字架」と実質的に等しい意味を持つものと言えるだろう。ブラコーニは、サンタ・プデンツィアーナのアプシス装飾がそれまでの図像を統合し、新しい図像の形成を促したことを指摘している<sup>36</sup>。また、スピーザーはイームの研究を踏まえ、教会アプシス装飾の展開において、カタコンベなどの葬祭美術における魔術師としてのキリストが、ここに至って権威ある神としてのキリストに変わったことを指摘している。スピーザーはその契機としてアリウス派との論争を挙げる。キリストが神性と人性を兼ね備えた存在であるとする主流派に対し、アリウス派はキリストに神性を認めなかった。キリストの神性を表現する図像が成立した背景には、この論争があったというのである<sup>37</sup>。

いずれにしても、こうした図像が表現していることは死に対する勝利、復活の栄光であり、キリストの神性であり、人としてのイエスの十字架における無残な死でないことは明らかである。そしてキリストの再臨を意味する点において、ナポリ、サン・ジョヴァンニ・イン・フォンテ洗礼堂の天井（図6）やラヴェンナ、ガッラ・プラチディア廟の天井に描かれた十字架と共通の内容を持っていることができる。最初期のキリスト教美術において、十字架やキリストの磔刑がいかな

<sup>33</sup> 聖堂への改装およびアプシスのモザイク壁画についてはMatteo Braconi, *Il mosaico dell'abside della basilica di S. Pudenziana a Roma La storia, i restauri, le interpretazioni*, Tesi di dottorato in Archeologia Cristiana e Medioevale, Università degli Studi Roma Tre, 2014に詳しい。ブラコーニによればアプシスの装飾は384年から399年在位の教皇シリキウス時代に位置づけられる。p.177.

<sup>34</sup> Braconi, figg.34-38.

<sup>35</sup> Ihm, pp.80-83.

<sup>36</sup> Braconi, p.210.

<sup>37</sup> J.-M. Spieser, pp.63-73.

る意味を持っていたかを考える上で興味深い作例がロンドンの大英博物館に二点所蔵されている。一点はコンスタンツァの半貴石と呼ばれるインタリオ(図7)である<sup>38</sup>。この小型のインタリオは、横13.5mm、縦10.5mm、ルーマニア東部のコンスタンツァで発見されたと伝えられるためこの名がある。おそらくローマ帝国の東部で4世紀前半もしくは中頃に制作されたと推定されている<sup>39</sup>。横長の楕円形の中、中央に十字架に架けられたキリストが表され、左右には一列に並ぶ着衣の人物がそれぞれ6人ずつ描かれている。注目されるのはここに刻まれた図像が、キリストの磔刑であること、そして正面向きに表されたキリストが全裸であることである。また両腕は横木に釘付けにされておらず、手首を縛り付けられているように見える。このインタリオに見られる磔刑の表現は後の作品にくらべると異例に思われるが、4世紀から5世紀にかけてのキリストの死に対する勝利、キリストの神性と権威を表現する潮流にかなったものである<sup>40</sup>。そうであるならば、これは「勝利の十字架」のヴァリエーションとみることができ、石棺装飾における勝利の十字架が磔刑に置き換わったものと考えられるだろう<sup>41</sup>。そして、年代推定が正しければ、マスケル・カスケットやサンタ・サビーナ聖堂扉に先立つ時期に磔刑の図像が存在した証拠となるものである。この種の作品は印章として用いられることがあった。すなわち、このインタリオの所有者は、キリストの磔刑の図像を彫ったインタリオを、身近に置き、あるいは身につけ、日常的に用いていた可能性があるのである。

もう一点は血石(ブラッドストーン)に刻まれたインタリオである(図8)。本作は縦30mm、横25mm、



(図6) 《アルファとオメガを伴う十字架》5世紀 ナポリ サン・ジョヴァンニ・イン・フォンテ洗礼堂(筆者撮影)



(図7) 《キリストの磔刑(コンスタンツァの半貴石)》4世紀前半もしくは中頃 ロンドン 大英博物館

[https://www.britishmuseum.org/research/collection\\_online/collection\\_object\\_details/collection\\_image\\_gallery.aspx?assetId=186312001&objectId=59062&partId=1](https://www.britishmuseum.org/research/collection_online/collection_object_details/collection_image_gallery.aspx?assetId=186312001&objectId=59062&partId=1);

<sup>38</sup> Harley-McGowan, 2011.

<sup>39</sup> Harley-McGowan, p.214.

<sup>40</sup> Harley-McGowan, p.216.

<sup>41</sup> ibidem.



(図8) 《キリストの磔刑》2-3世紀? ロンドン 大英博物館

[https://research.britishmuseum.org/research/collection\\_online/collection\\_object\\_details.aspx?objectId=59616&partId=1;](https://research.britishmuseum.org/research/collection_online/collection_object_details.aspx?objectId=59616&partId=1;)

厚さ5.8mmの不規則な楕円形をしている。表面には磔刑に処された人物像が刻まれており、加えて表面、裏面とも九行ずつの銘文が刻まれている。銘文は大部分未解読であるが、一部ギリシア語で、「子、父、イエス・キリスト」「架けられた」「インマヌエル」と読める箇所がある<sup>42</sup>。したがって、ここに表された磔刑に処された罪人がキリストであることは疑いない。十字架にかけられたキリストは単独で、他の人物はいない。キリストはヌードで髪は長く髭を生やし、両足を開き、腕を横木の下で斜め上に伸ばす形で十字架に架けられている。釘で打ち付けられたようには思われず、腰から腿にかけての描写は横木に腰掛けているようにも見える。後の一般的な磔刑のキリストとは異なっており、当時実際に行われていた処刑の有様を反映しているのかもしれない。

この図柄はアレクサメノスのグラフィートにもいくぶん類似している。ということは、キリストの磔刑という事件の重要性が、人々に広く認識されていたこと、そしてアレクサメノスのグラフィートと同時代のキリスト教徒の《磔刑》が存在した可能性を示唆する。ブラッドストーンのインタリオは、その可能性を裏書きする。

このインタリオは護符であった可能性も指摘されている<sup>43</sup>。エジプトやシリアにおいてはギリシア、ローマ時代を通じてこの種の護符が数多く作られ、2世紀から3世紀にかけて、ローマ帝国に広く普及したことが知られている。ハーレイ＝マクゴワン<sup>44</sup>の指摘によれば、このインタリオはそうした護符に、材質、大きさ、銘文ともよく似ている。この推測は、イエスの名が悪霊を退散させる力があると主張するユスティノスの『第二弁明』6.6の記述を思い起こさせる。十字架や磔刑という図像が、キリスト教という確立された思想体系を持つ宗教となる以前から、民衆的な心性に根ざし、日常的に用いられていた可能性が、ここに浮上してくるのである。

## おわりに

大英博物館所蔵の二点のインタリオが印章や護符として、日常的に用いるものであったならば、キリストの磔刑という主題や十字架というモチーフに対するわれわれの見方は修正されなければならない。というのも、一般に、コンスタンティヌスによるキリスト教の公認後、長く磔刑が表現

<sup>42</sup> Harley-McGowan, p.217.

<sup>43</sup> Harley-McGowan, p.217.

<sup>44</sup> Harley-McGowan, ibid.

されなかったのは、磔刑というおぞましい刑罰に対する否定的な感情が作用していたからだと考えられてきたからである。そのような見方はあるいは正しくないかもしれない。無論、ここで性急に結論づけることはできない。しかし人々が、2世紀、3世紀という、まだキリスト教の教義が十分に確立されていない早い時期にキリストの磔刑や十字架のモチーフをもった作品を制作していたとするならば、それは人々が磔刑や十字架に特別な超越的な力を求めていた可能性を示唆する。人々は磔刑や十字架に対して、この世の悪からの、誘惑からの、不幸や災いからの保護を、そして幸運と力が、癒しが与えられることを求めていたに違いない。これらのインタリオの所有者については何もわかっていない。キリスト教徒であるか否かも明らかではない。しかし、彼ないし彼女がこのインタリオに寄せる想念は、ノートルダムの十字架や世界貿易センタービルの十字形鉄骨に寄せる現代人の想念と大きな隔たりはないように感じられる。

#### 参考文献

- Braconi, Matteo, *Il mosaico dell'abside della basilica di S. Pudenziana a Roma La storia, i restauri, le interpretazioni*, Tesi di dottorato in Archeologia Cristiana e Medioevale, Università degli Studi Roma Tre, 2014.
- Grabar, André, *Christian Iconography*, Princeton University Press, 1968.
- Granger Cook, John, Alleged Christian Crosses in Herculaneum and Pompei, in *Vigiliae Christianae* 72, 2018, pp.1-20.
- Harley-McGowan, Felicity, The Constanza Carnelian and the Development of Crucifixion Iconography in Late Antiquity, in C. Entwistle and N. Adams, *Gems of Heaven Recent Research on Engraved Gemstones in Late Antiquity*, British Museum Press, 2011, pp.214-220.
- Ihm, Christa, *Die Programme der christlichen Apsis-Malerei vom vierten Jahrhundert bis zur Mitte des achten Jahrhunderts*, Franz Steiner Verlag, 1960, pp.80-83.
- Jensen, Robin M., *The Cross History, Art, and Controversy*, Harvard University Press, 2017.
- Krautheimer, Richard, *Rome Profile of a City, 312-1308*, Princeton University Press, 1980. (リチャード・クラウトハイマー『ローマある都市の肖像 312～1308年一』中山典夫訳 中央公論美術出版 2013)
- Spieser, J.-M., The Representation of Christ in the Apses of Early Christian Churches, in *Gesta*, 1998, vol.37, No.1, pp.63-73.
- 青野太潮『十字架の神学の成立』ヨルダン社 1989
- 青野太潮『「十字架の神学」の展開』新教出版社 2006
- 青野太潮『パウロ 十字架の使徒』岩波書店 2016
- 荒井献[編]『使徒教父文書』講談社 1998
- エイレナイオス『エイレナイオス5 異端反駁』V キリスト教教父著作集Ⅲ/3 大貫隆訳 教文館 2017
- ゴンサレス, フスト『キリスト教思想史』I 石田学訳 新教出版社 2010
- タキトゥス『年代記』国原吉之助訳 岩波書店 1981
- ダニエル, ジャン『キリスト教史 I 初期教会』上智大学中世思想研究所編訳 監修 平凡社 1996
- 名取二郎『初期キリスト教美術におけるアナスタシスの十字架について』『芸術学論叢』vol.2, 1979, pp.28-42.
- 名取二郎『初期キリスト教美術における勝利の十字架』『アガルマ 澤柳先生古希記念美術史論文集』同朋舎, 1982, pp.53-74.
- 山田香里『受難物語サイクルの成立と『勝利の十字架』石棺』『神学研究』59, 2012, pp.75-86.
- ユスティノス『第一弁明、第二弁明、ユダヤ人トリュフォンとの対話』キリスト教教父著作集 I 柴田有訳 教文館 1992
- ヨセフス, フラウィウス『ユダヤ古代誌』6 秦剛平訳 筑摩書房 2000年